

# 犬吠埼瑠璃の反証

---

3分経ったぜ——黒岩が告げる。

黒岩 「さあ、答えを聞こうか。自分がやったことを認めるな？」

翡翠 「違う……私はやってない」

黒岩 「しかし、それ以外の可能性は既に否定した。それとも——」

別の可能性があるのか——と背後から声がした。

いつの間にか、玄関口に探偵・犬吠埼瑠璃いぬぼうざき るりが立っている。

犬吠埼 「なんとか間に合ったみたいですね。黒岩さん、捜査は慎重にしてくださいと忠告したはずですよ」

黒岩 「おいおい、なんで探偵ごときに警察が従わないといけない？」

犬吠埼 「何を焦あせっているんですか」

その一言で黒岩の反論が止まった。

刑事たちの輪を割って、犬吠埼は歩を進める。

犬吠埼 「気付かれなくなかったんですよ。あなたが犯人であるという可能性に」

黒岩 「ふざけてんのか？ 俺には飛ばしのスマホを持ち込めない」

犬吠埼 「持ち込めますよ——怪盗ホープなら」

最後の反証をしましょう——犬吠埼は告げる。

犬吠埼 「事件当夜、あの場に怪盗ホープに化けられた人物はいなかった。でも別に、怪盗ホープがいなかったとは言っていない。わかりますよね？ 黒岩さん、私はあなたが怪盗ホープ本人だと——怪盗ホープの正体だと言っているんですよ」

犬吠埼 「黒岩さんが怪盗ホープとなれば、推理の前提が崩れます。怪盗ホープなら他人に変装してセキュリティゲートを潜くぐり、自分の名前をリストに残さずメインホールに飛ばしのスマホを持ち込むことができた。つまり黒岩さんでも飛ばしのスマホをホール内に持ち込めたんです」

馬鹿げている、という声がどこかから漏れる。犬吠埼は構わずに続けた。

犬吠埼 「この推理の裏付けを取るため、私は事件当日の来客者に聞き込みを行いました。その結果、一人だけ証言が得られない人がいたんです。浅尾<sup>あさお</sup>誠<sup>まこと</sup>さん——近所に住む高齢の男性で、事件の一週間ほど前から、毎日13時頃に展示会場にやってきては、10分ほど滞在して帰られていました」

犬吠埼 「彼は事件の翌日、散歩中に階段から落下して亡くなったそうです。彼の死に事件性はないそうですが……これで彼の証言は得られなくなってしまいました」

犬吠埼 「事件当日の夜に記された彼の日記には、『最近はお気に入りの場所ができて、散歩がてら、毎日お昼にその場所に通っている』と書かれていました。ですが、このお気に入りの場所が宝石展ではなかったとしたら——つまり毎日展示会場に現れていたのは、怪盗ホープが変装した偽物だったとしたら」

犬吠埼 「事件当日に浅尾さんがメインホールに来たとき、事件に遭遇した5人のうち、黒岩さん以外の4人全員がホール内にいました。よって——この犯行が可能なのは、変装して飛ばしのスマホを置くことができたのは、黒岩さんただ一人です」

以上、反証終了です——と犬吠埼は締めくくる。

いつの間にか刑事たちは静まり返っていた。まるで声を出すと、同僚が犯人であるという事実が確定してしまうかのように。

結局、沈黙を破ったのは黒岩だった。くくく、と笑っている。

黒岩 「——冗談が過ぎるぞ、犬吠埼。まるで俺が犯人だって確定したみたいな口ぶりだが、俺の推理が死んだ訳じゃない。翡翠が犯人の可能性も残っているだろう」

犬吠埼 「はい……あくまで私はもう1つの可能性を示しただけです。ですがこれで、翡翠さんが犯人である根拠——他に誰も犯行はできなかったという前提は崩れました」

黒岩 「まったく……犯人がどうして怪盗ホープを騙<sup>かた</sup>ったのか、偽の予告状を出したのかはずっと気になっていたが。まさか、この俺が怪盗ホープだと疑われるとはな」

黒岩の言葉に、犬吠埼は表情を曇らせる。

犬吠埼 「だから言ったんです。慎重に捜査してください、と。次に怪盗ホープが盗みを働くまで、黒岩さんのことをこっそり監視できれば……黒岩さんが怪盗ホープなのかどうかは判断できるはずだったんです」

犬吠埼 「ですが——もうこれ以上、容疑者を絞り込むことはできません」

この事件は解決不能になりました——そう言って探偵は目を瞑<sup>つむ</sup>った。

黒岩も、他の刑事達も何も言わない。

少なくとも、この場におけるこれ以上の解決は不可能に見えた。

そのとき——通話中のまま放置していた堇青のスマホから、ひどく頼りない声が聞こえてきた。

▽推理カード「翡翠の潔白」「黒岩鋼の潔白」が更新された。

▽捜査&議論（フェイズ4）を開始する。